

# tab

No.  
24

2  
0  
1  
0  
/  
09  
/  
15

後藤美和子 / 木村和史 / 長尾高弘  
野村龍 / 福島敦子 / 秋川久紫 / 山岸満  
中村剛彦 / 坂入進 / 倉田良成

榊 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：手に火を持って／01  
野村龍：新聞／02  
中村剛彦：クロイツェル・ソナタの幻／04  
坂入進：般若／05  
福島敦子：共存・真夏の青空／07  
長尾高弘：包み隠さず／09  
秋川久紫：戒厳令下の処方／13  
倉田良成：なほうらめしき——私の小倉百首から／14

文

- 山岸満：アートに出会う——内藤礼展／16  
木村和史：母を見舞う／17  
倉田良成：詩的喩の基礎について／19  
あとがき集／23

画：和田彰


誌 第24号／2010年9月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kaitais11@k3.dion.ne.jp



2010   
The Troubadour's Serenade

後藤美和子

## 手に火を持って

あの時小さく香りをかいだ

湖沼に私たちは座り込んで

あなたはぜひいぶん年上に見えた

髪の色はカラス麦の

長い長い呼吸みたいで

吸い込んだまま息をとめ

あなたは空を目だけで飛んだ

あなたはとても静かに話した

時折あきらめたみたい

ひざまずいて睡蓮をすくおうとした

けれども花の影には群舞があつて

そこでは私たちは踊っていた

くるくると

夜の松明

風に輪は押し流されて

いつしか小舟は沖に舞う

あなたは棧橋を歩いていく

振り向いた時

すこし怒ったように誓った

来年の収穫を

また手伝いにきます

焦げついた炎の色の馬に乗って

墓から抜けてやってきます

(皆既蝕五四)

野村龍

## 新聞

黒揚羽達に包まれて

谷底へ降りていく

せせらぎのなかで

金の鍵が呟いている

九つの輝きを飲みくだと

透明な希望が浮かびあがる

光が開き

芥子の花が一斉に飛び立つとき

壁は崩れ

肺のなかから 歌達が勢いよく溢れだす

《唯今 鶴のパイが焼きあがりました！

皆様 熱いうちにどうぞ！》

岐阜に下野した友人は

今頃 なにをしているだろうか

冠省 帝都はこの荒みようです

スランプには くれぐれもご注意を 不

風の精の 薄緑のやわらかな髪から

やすらぎが立ち昇り

優しい手が 静かに差し伸べられて  
咳を 穏やかに拭い去る

脳を 酸化から護るため 休日には  
魚の油で よく洗います

中村剛彦

## クロイツェル・ソナタの幻

その人はいま

病室の窓から射す白光に眼を細め

母から少女へもどる

私は傷だらけのレコードに針を落とす

子を産む前に捨てた

この美しかった生の形見を

かつて深夜の台所で聴き入るその背は

子らには眩い夢の切れ端にしか見えなかった

(誰ひとり目覚める者はなかった！)

私は三十年の逃亡の果て

今日、初めて客席に座り

鍵盤を弾く見知らぬ少女を見つめる

私に連れ添ってきた瘦せた影が遠のいていく

(彼はもう二度と帰って来ない)

最後の一音が消えるとき

母の眼光が私を射抜く

子であることの決心を

明日私は抱くであろうと

黙って病室を去る

坂入進

## 般若

ケンが暗い坂を下りているとき

ふと判ったことがあった

それは、自分はいない！ということだ

あるのは、たぶたぶ揺れながら坂を下りるこの肉だけだ

だったら、おれなんていないんだ、と気づいた

おれがないのなら

今までへおれだと思っていたものは何だろう

それは…、無だ

夜霧がとともゆつくりと流れていて

おれと夜霧に、まったく違いはない

ひえびえとしたしあわせがケンのカラダを浸した

杣道のつづらおりで、顎をあげれば

入道雲が暮れかかる太陽に半身を輝かせ

ゆつくりと群青の中に沈んでゆく（のが見える）

それが、無だ

鼻腔を伝い肺腑の谷間いっばいに

かぐわしく冷たい空気を吸い込む

それが、無だ

遠くの黒い森で

鶯ウズが鳴いている

それが、無だ

谷の底、はるか坂の下の集落から

かすかな煮炊きの煙りがのぼってくる

それが、無だ

目、耳、鼻

感覚はそれぞれに独立し

いつものように〈世界〉を作らず

ただ、

深い安堵のなかで

それぞれの独立を宣言していた

下りてゆくのだ

いま あの谷間に

到底辿りつけないと思っていた

あの谷間に

(2010.7.31)

福島敦子

## 共存／真夏の青空

共存

今月はお父さん どうでしたか

あれっ？なんやっただけ 介護日記に書けてないです  
まぼろしもあったのですが…  
いつやったかな…

どんなまぼろしでしたか

あれえ…どんなんやっただけ  
覚えてない

まぼろしと共存できたんですね

はあ

あなたが

## 真夏の青空

大仏さんの前には

人だかりができていた

外国人もたくさんいた

大仏さんは写真を撮ってもいいから

ばしゃばしゃフラッシュを浴びていた  
その日

奈良のいろんなお寺をめぐるだけけれど  
大仏さんが一番人気だった

大仏さんを造るのにかかわった人の中には  
生活がもつと苦しくなった人達も  
たくさんいたことだろう  
亡くなった人もいるから  
大仏さんを憎んだ人達もいたことだろう  
そう思うと 怖かった

でも

ありがたいと思つて  
感謝してかかわった人達もいたことだろう  
りくつでは説明できない不思議な御利益  
に涙を流した人達もいたことだろう  
そう思うと 怖かった

人間の執念みたいなものが怖いのかな

今もなお たくさんの人を引き寄せる大仏さんは凄  
いと思つたけれど

人ごみに押し出されて見た

大仏殿の前のぼかんと晴れ渡った青空がいいな  
と思つた

人間が造つたのではない

まぬけた真夏の青空のほうがいい

ほんとうにうつくしい  
と思つた

## 包み隠さず

今年の夏のように

こんなに暑いときは、

ちよつとももの考え方を

変えてみるチャンスかもしれません。

いや、考え方を変えるとか、

そんな大げさなことでもありませんが、

暑いのでから、

ちよつとズボンを脱いでみましょう。

足のまわりを覆っていた熱気が

ぱつと飛び散って、

足がふわつと軽くなります。

なんだ、こんな簡単なことだったのか。

気がつくと窮屈なのは上半身です。

ちよつとシャツも脱いでみる。

もわつとたまっていた湿気が

一気に浮き上がって、

胴回りがふわつと軽くなる。

そうすると、残るはあそこだけです。

毛がびっしり生えているのに、

夏でも二枚以上の衣類で

嚴重にしまつてあるところ。

もつとも、すでに一枚取つてある。

あとはたぶんもう一枚。

詩なのに常識的なことを言っちゃいますが、

こういうことはどこでもやれるわけではありません。

他人から見るところでやるのは、

やっぱり迷惑ですよね。

しかし、一人でいられる場所だったり、家族が理解してくれる家の中だったりしたら、素裸になることが

そんなに悪いことであるはずがない。

ちよつとやり慣れないことだけど、

工夫次第で快適に暮らせる。

たとえば、小便をした後、

おざなりな終わり方をすれば、

廊下にポタポタ雫を垂らすことになるだろう。

それが嫌ならきちんと拭いて出てくればよい。

大の方も、

いくら紙できれいに拭き、水で流したとしても、

その後で尻の穴を指先で触れて鼻先に持っていけば

ぷんにおうものだ。

そのまま椅子に座ったりするのが嫌なら、

風呂場に直行して念入りに洗えばよい。

でも、裸になる前は、

そういったものは全部下着が吸収していたわけだ。

どっちがキレイだろうか。

裸の方がよいことはまだある。

トイレでズボンを上げ下げする必要はないし、

二本の足の間に引っかかるものもないので、

楽な姿勢で用を足せる。

衣類で腹を絞め上げなくなる分、

便秘もしにくくなる。

風呂に入るのも出るのも簡単。

全部同じモードでできる。

冷房の設定温度が高くても

全然暑いとは思わないし、

濡れた手だからだに触れば、

どんな空調よりも涼しい。

(気化熱というやつです)

何より裸になると気持ちがいい。

ちよつとした空気の動きに敏感になる。

頭のとっぺんからつま先まで、

自分が一つにつながっていることがわかる。

もちろん、よいことばかりではない。

悪いことの筆頭は、変人だと思われること。

変態と言われるかもしれない。

そう思われたいようにするために、

人に言えない秘密を持つこと。

変態というのは、

広辞苑によれば「変態性欲の略」

なのだそうだけれども、

裸が気持ちいいというのは、

直接的には性欲ではない。

性欲を抑圧することでは決していないが、

性欲を異常に昂進することでもない。

だから変態ではないのですよ、

と説明しても、

詩だろうか、

詩でなかるうが、

なかなか納得してもらえないだろう。

まあ、そんなことでムキになるのはやめましょう。

裸が気持ちいいからと言われたので、

やってみただけ、

かえって落ち着かない、

何がいいのかわからない、

という感想を持つ人も、

世の中にはいるようです。

そんな人は、

口車に乗せられて、

ふだん裸にはならないところで、

裸になってしまったということを、

いつまでも恥ずかしく感じ続けるのでしょうか。

お気の毒なことです。

そもそも、裸になったとき、

自分の身体にうっとりできる人はごくわずかで、

たいていは醜い身体に幻滅するものでしょう。

いや、幻滅するのはそれだけではないはずで

あれやこれやのマボロシが減びていく。

恥ずかしいという気持ちは、

マボロシを守ろうとする必死の抵抗だ。

でもね。

幻滅すればいいじゃないですか。

隠したつもりになっても、

それが現実ですよ。

現実を認めてしまえばいい。

人それぞれですから、

何がいいのかわからない、

という感想を持たれるのは、

そう思う方の勝手ですが、

願わくば、

マボロシを守りたいからといって、

あなたが理解できないことをしている人たちが

いじめないであげてください。

## 戒厳令下の処方

魂が刻印されていない手紙を読むのは楽しい。それは、決して人を詩に引き寄せたりせず、ましてや誰かを勇気づけたりしないから。

正犯の行為が正当防衛であれば教唆犯は成立しない。ゆえにその犯意を持つ者は、何時だって急迫不正の侵害の存在を主張し、実行者に対してその最良の対処方法を教示する。だが、堅牢を旨としたはずの暗号は解析され、浅薄なバイアスが掛けられて、故意に半音ずれた階調に悉く変換された。

動植物たちは鑑賞用だなんて言われて果たして平気なのだろうか。数える者は他者の尊厳を意図せずに奪い、そして自らも奪われる。

その時、夥しい鮮血が噴き出したにもかかわらず、朝の会議室の中にそれほど悲壮感が漂わなかったのは、流れた液体が淡い緑青色をしていたからなのだろう。手負いのカラスは幽閉され、乾いた白日夢を裏返すようにしてその間隙に無音の銃声が轟き、邪気たちの宴は呆気なく終わったのだ。

されば。

肝心なものが正当に売られている市場に行こう。不意に消えてしまったり、月の裏側に身を隠したりしてしまうことのない成熟した市場に。

## なほうらめしき

女のもとより雪ふり侍ける日かへりてつかはしける

明ぬればくるゝものとはしりながらなほうらめしきあさぼらけかな

藤原道信

若いころはよく飲んだ。新宿で、渋谷で、中野で。それから地元の居酒屋で。東京で飲むときには大抵一人ではなく、横浜の地元で飲むときは大抵一人であつた。ごく若いころから五臓六腑に沁みわたる快感を知っていたのだから、酒がそれほど弱いほうではなかつたのだろう。酒は飲めば当然のこゝと気持ちよくなるが、それが頂点を極め、私の場合大抵そのまま眠くなって寝入ってしまう。そして決まって朝起きたときの気分の悪さといつたらない。されこうべの中身が全部暗鬱な鉛に変じたよう、そして胃袋は強力なポンプのごとくもう無い内容を排出しようとする蠕動を止めない。それでも朝が遠のき、午後の涼風が起つてあんなに荒れ狂つていた悪心の海にも凧が訪れる。午後の凧がはつきりと夕凧の色合いを見せるとき、さあ再び飲むべき夜の到来となる。若さとは恐ろしいもので、この第二夜ともなると、ありきたりの酒が実にこの世のものならぬ甘露甘美さをもつて肺腑を抉る。ここまでの境涯に達するためには、世の中によくいる、単に酔っぱらいたいから酒を飲むという本末転倒の考え方を改めなくてはならない。酔うなどいうのではない。酩酊を自己目的にするなどということだ。それは神なき神酒と同じく自分に淫することでもあるということだ。さいきんはどうか知らないが、以前はこの酔っぱらいたいから酒を飲むという男が多かつた。酔っぱらつて何をするかという、愚痴を言つたり何とか上

戸になるのはまだよいほうで、特にわれわれよりちよつと年上の世代など、大抵は好色になった。これと対照的に、これまたさいきんはどうか知らないが、水商売の向きのほかは大抵の女はあんまり酒を嗜まないのです、酒量の行く女と出会うと百年の知己を得たような気になったものである。そういう女の一人と、あるとき二人きりで飲むことがあつて、何をどう飲んでどういう話に花が咲いたのか、大変愉しかった一夜の別れ際、突然彼女に抱きつかれた。まったく意外に、そして慮外なことに感じたのは、私がまだ幼い心しか持ち合わせていなかったせいなのか。若者らしい欲望は有り余るほどあつたのだが、それが、私の中で、ある種の祭壇にもひとしい飲酒という雅の行為と結びつかなかったのだらう。彼女には気の毒なことをした。その後も中野にあつた学生寮や、妙法寺裏、巢鴨の友人の部屋などに流連荒亡をつづけ、死んだ目で迎える地獄の朝と、また巡ってくる輝ける夜の闇のはざまで、もう家には永遠に帰らずに、いまでも飲み続けている小さな私の影がある。

## アートに出会う(8) 二〇一〇年一月一九日

# 神奈川県立近代美術館 鎌倉

内藤礼展 「すべて動物は、世界のうちにちようと水の中に水があるように存在している」

いわゆるアートのジャンルにインスタレーションというものがある。このくくりはかなり新しいといえる。その昔、といってもそれほどではないときの記憶では「ハプニング」、「レディメイド」、「アドヴァタイズ」、「エンバイアラメント」、「コンセプトチュアルアート」、「インタメディア」等々の呼称であったようにおもう。それらをひとくくりにしてインスタレーションなる呼称が登場してきたとわたしは理解している。そして、そのもとに——むろん以前もであるが——アートの間口が広がったといえよう。その背景には大衆社会の到来とそれに伴う社会の流動化があったのである。

会場の扉を押すと暗い、まず暗くて目が慣れるまでのひと時があった。会場の壁面のガラスごしになにかがうかがわれた。そのいくつかに接し、わたしなりに内藤の手の内がみえた。すぐに、同行の妻の戸惑いを帯びた吹きがささやかれた。——なに、なんなのこれ……。

わたしはこの問いに苦笑と微笑を禁じえなかった。そしてこのふたつの笑いの相のあいだに内藤の表現の位相があるとみた。内藤は自らが提示するモノにたいして出来るだけ注釈を排除しようと先手をうったことがまずみえた。しかし、そのさきなのだ本当の勝負とは。わたしの二つの笑いの相に内藤の表現位相の亀裂が顕れていると思った。内藤は自らが指し示す——これは訪れる観客であるわたしたちのおかれた場にたいしてできるだけ日常、つまり変哲もないモノをそこに置く。たとえば小さな壘に水をフルに満たして其処此処におく。しかしその汀に表現の賭場口があるのだ。インスタレーションとしてさしださ

れた内藤の作品から、作品として提出された展覽のなかから彼女の差し出されたものは不十分であったとおもう。もつとはつきりいえば、独りよがりだとおもう。内藤の選択した表現で言えば、自分個人における考えあるいは感性から紡ぎだされたものは、恰も壘に封じてそつと流れにのせればどこかの岸辺、つまりわたしたちというちいさな入り江に着くとおもわれている。しかしこのことが実現する、つまり表現として成り立つにはじつはいくつかの相が表現に内在していなければならぬ。内藤はみずから指し示す場——つまりわたしたちが訪れる会場とよばれる場であるだけ普通、つまりありきたりのモノであるビンと水、あるいはヒモ、そしてシートといったモノでインスタレーションを展開している。そのインスタレーションの位相はそれが展開されている場から飛躍しないようなモノによってささえられているため、ぎゃくにその場そのものが浮上してゆくというしかけになっている。加算、あるいは減算という方法上の意識がここにははつきりとみとれる。つまりごくありふれた日常の場が、そこにひとつの濁点をあたえることによりわたしたちの特異な場に変換されるというしかけなのだ。これを独善的に提出しようとしているのが内藤の作品世界といってよいとおもう。たぶん内藤はとても限られた、極私的な世界で紡ぎ出した至近な世界の意味をじつとみつめてきたヒトなのだとおもう。わたしの微笑はこのことに対するものである。しかしここから表現としてそとの世界につながるためには幾つかの手続きが必要なのだ。わたしの妻の戸惑いはこの表現に内在しなければならぬ位相と媒介の不在にあったとおもえるのだ。

## 母を見舞う

7月1日、東京を発つ。帯広空港まで叔父と叔母が迎えに来てくれる。そのまま老人ホームに寄ってもらって父と会う。父は、認知症の悪化はまだなさそうに見える。手紙や日記を普通に書いていようだし、会話もまったく問題ない。とりあえず安心する。

ホームの職員に挨拶と簡単な報告をしてから、厚生病院の精神科に向かう。母と会うのもおおよそ三ヶ月ぶりになる。三ヶ月という時間は、それ以上は病院にいられない期限でもあるし、老人ホームに戻らないと契約解除の協議に入ることになる期限でもある。母を見舞うといってもじつさいは、母をどうやって説得して病院からホームへ戻そうか、気が重い算段で頭がいつぱいになっている。説得が難しいのは分かっている。結局は強引に連れていくことになる。算段といっても、そのときの抵抗の情景がただ浮かんでは消えるだけだ。

叔母たちには下で待っていてもらって、ひとりで病室に入る。

母は頭と足の向きを逆にして、畳んだ掛け布団の上に頭をのせ、横向きになって目をつぶっている。口元にハンカチが置いてあって、よだれのシミのような汚れがある。すっかり痩せて、衰弱が進んでいるように見える。

心配を感じたのか、目を開けてわたしを見た。とくに驚いた様子もない。

「どう？」

「おにいちゃん？ 来たの？」

「さつき空港に着いた。先におやじに会ってきたけど、元気だったよ」

「なんにもできないの。ごはんも食べられない」と言っ、すぐにまた目をつぶる。

椅子がないので、ベッドの縁の母の足元にそっと腰かける。

「歯は磨けてるの？」

「磨くようにしてる」

「ちゃんと磨いていれば歯槽膿漏は悪くならないって、歯医者さんが言ってたよ」

「洗面所まで歩くのも大変なの」

それから急に、上半身を起こして、

「ホームの契約は無しにしてちょうだい。あんなところには絶対に戻らないからね」と気色ばんだ声で言う。

以前は、病院には絶対に戻らない、と言っていた。人を困らせるだけの言葉だが、母にはどうしても言う必要がある言葉なのかも知れない。そのことに少しづつ気づき始めてはいる。

「でも、病院にはいつまでもいられないよ」

「家に帰る。歩いて家に帰るから、靴を持ってきてちょうだい。靴がないの」

家に帰るといふのは、家に帰って死ぬという意味だ。未遂が既遂になる場合もあります。という医者言葉が頭をよぎる。わがままを言っているだけではない。母の意志がそこにあるのが分かる。

「帰っても誰もいないし、ひとりじゃやっていけないよ」

「いいの。いいから靴を持ってきてちょうだい」子供のように、ぱたたと布団に顔を埋めて、また目をつぶる。

父と母が、ふたりの老後のことを考えて、一緒に施設を見学して歩いたこともあるようなのに、そのような覚悟の痕跡を見つければ難しい。しだいに訳が分からなくなっていく老いの道を、ふたりだけで決めようとするよりも、今のよう家族を手こずらせている方が、むしろ本来の道のようにも思える。

母のなかでなにかが起こっていて、それはある種の病気に過ぎないはずだが、そのせいでなぜ周りの人間がかき回されるのか、不思議といえれば不思議だ。病気だと納得するだけ

でいいはずなのに、そうできずに、みんなして深刻になって途方に暮れる。混乱はおそらく、母が病気だからではなく、母の言葉が病気のせいではまっているのだろう。

刻み食もなかなか喉を通らないらしい母の瘦せた脚に、パジャマの上から手を置いてみた。認知症の父を毎晩マッサージしていたので、母にもつい手が伸びたのかも知れない。そのまま手を置いて、気を通す。以前に入院していたときは、触られるとびくつと体縮めてしまった。あのときのような反応はない。手を置き続けても、そのままにさせている。母の中に素直ななにかが生まれているかのような。あるいはただ、衰弱が進んでいるということだろうか。しかし、なんであれ、受け入れられるとほっとする。

それにしても、母とこんなふうに向き合ったことがこれまであったろうか。父とよりも母と多くの言葉をかわしたのは確かだが、感情のからまない、どこか理屈っぽいものが多かったような気がする。わたしが三歳のときに母が後妻にきたという事情が、わずかな遠慮としてふたりのあいだに存在しつづけたのは確かだと思う。

母はもう回復しない。このままなにもしないようになってひたすら弱っていく。それをわたしは、黙って眺めるしかない。そのような覚悟がしだいにはつきりした形になりかけている。いろいろな言って、やらせようとして、すべて拒絶され、大きな声を出したり、苛ついていたのはついこあいだのことなのに。

母の脚に手を置いてみると、自然にわたしの目が閉じてくる。気が張りつめているはずなのに、うとうとしたくなるのは疲れのせいばかりではなくて、脳出血の影響もあるようだ。脳外科の待合室でうとうとしていたら、わたしと同じような病氣らしい、並んで座っているふたりも、そっくり同じ感じでうとうとしていた。

母の斜め向かいのベッドの患者が、その隣の患者にしきりに話しかけている。「あの人は話し出すと止まらないのよ。うる

さくて」向かいの患者に聞こえる声で、母が言う。

目を閉じたまま、母の声を聞く。母もおそらく、目はつぶったままだろう。

「あんたが先に倒れたらみんな困るんだからね。誰が父さん母さんの面倒みるの」と叔母が、わたしに言った。わたしの体を気づかっでそう言ってくれるのは分かるが、だからといってわたしにどうにかできる問題ではない。あと一センチ出血がずれていたら半身不随、車椅子生活になっていました、と医者は言った。反対側にずれていたら記憶が駄目になっていました、と回診の若い医者が言った。そうならなかったのはわたしの運命だが、両親のためにそうならなかったのではない。運命というのはどっちに転ぶか分からない。どっちにも転ばないときもある。転んだら、転んだ方に生きていけばいいだけの話だ。努力はできそうにない。

「この状態だと、退院させるのはちょっと心配ですね」

病棟に入りがけに顔を合わせた担当の医師が、わたしに言った。たとえそうであっても、一度は老人ホームに戻さねばならない。施設に入るとしたら、要介護5まで看てもらえる今の施設より適当なところがあるとは思えない。役場の福祉課の人や親類の人は、どこでもいいから申し込んでおきなさい、と言った。父と母の状態の変化に応じて、適当な施設を探して入れる、などという悠長なことをやっていられる世界ではない。

医師の話では、一日でも戻れば戻ったことにしてくれる施設もあるらしい。おそらく老人ホームでも、そのような配慮はしてくれよう。おかしなルールのゲームみたいなものだが、とにかく退院はさせねばならない。「そろそろ帰るよ」母の脚から手を離しながらわたしは言った。返事はない。

「また来るから」顔を近づけて声をかけ、ベッドを離れる。母は黙ったまままだ。

「じゃあね。帰るからね」少しずつ母から離れ、わたしは病室を出た。

## 詩的喩の基礎について

それが詩的喩かそうではないか、喩とは何かと問う前に、普通の文章・陳述について考えてみる。現代口語文より表情がゆたかな文語風で考えたい。

- 一・雨いたく降る。
- 二・あさましき夢。

主語、述語、繫辞などが揃った、もつとも単純な組成の文と言える。この二つで表れていることは、それぞれの組織を成す語が、一語一義とは限らないということだ。一の、「雨(あめ・あま)」は語源的には「天(あめ・あま)」に関係づけられるし、またその天象という意識がまぎれもない。「いたく」は、漢字を当てはめるとすれば「甚く」だが、痛覚の「痛く」と同じところから発祥するものだ。また「降る」がもつとも基本的な語で、ある意味それ以上分割しづらいこと、「雨」の「天」以上にはなかなか溯れないに通ずるものであるに同じだろう。ちなみに古代人は雨や雪を、靈魂そのものが実体的に降るとみたようだ。「降る」という語はこういう意識で用いられたコトバだと認識しておきたい。二では「あさましき」が問題となる。主に人や生物の所作・挙措・振る舞いを形容するに、「あさましい」という形容詞が使用されることがある。ところがこの語は、そういう光景に出会った折の、そういう光景の側を形容するものでなく、本来深く用意があるはずの心が「浅むばかり」であるという、実はこちら側の心を形容するものであったのだ。さてまた「夢」が上代語「寢日(いぬめ)の転であるとは大辞林の説明だが、では「寢目」という音がその字義通りであるかと考えると、はなはだ心許ないものがある。

このように、文を分解し、語を遡及してゆ

くと、それ以上には(少なくとも現代共通語の理解からは)追ってゆけない、指向的で抽象的な「点」のようなものの配置が見えてくる。一語一義ではない、複数の義を持つ語や、複数の語に付き易い核の働きを持つ語が文章を成すときでも、われわれはいちいち、その多義性や語源を考えて一文を理解するわけではない。主語・述語・繫辞の機能(function)を通じて、機能そのものとして一文を理解する。私の実感とも、また仮説とも言えるのだが、主語や述語、対象語や修飾語などを遡及し濾過してゆくと、その「意味」は皆だんだん抽象的・指向的・繫辞的なものになってゆく気がする。たとえば、語根的な「いく(生く)」は、形容詞的な「生く矢」「生く玉」となったり、「敵し矛(いかしほこ)」と活用したりしていろいろな語に結びつくが、これらは却ってこの語のアトミックで抽象的な性質を表す。アトミックとはそれ以上「分割できない」という意味である。その「指向性」がその存在の証左といえる。

しかるに、繫辞からその意味内容自体は問えない。われわれは、辞「が」「へ」「とも」「さえ」「けり」「なり」などの機能を言うことはできない。かといって、一文に意味がないというわけでもない。繫辞が指向性を持つものであることによつて意味は成る。言い換えると、その機能・用法によつて意味が決定される。これは、主語・述語・対象語といった単位のそれぞれの「内容」の積み上げより文を解釈するという、モノド的な文解釈からの解放でもある。ある面から見れば一文は指向性そのものであり、別面からは、そして究極的には、一文は差異性そのものである。ところで、少なくとも日本地域において、われわれは、言語が、詩が、この千年二千年よりは

るかに長く無文字状態であったことを閑却すべきではない。前述の一も二も、その文は、本当は無文字を前提とする、つまりは音を重要なフアクターとするものである。喩を考えるうえでまず一点、ここを押さえておく必要がある。

さて話は変わるが、古今和歌集仮名序には詩経の六義りくぎに準じて六つの歌の風体ふうたいが挙げられている。曰く、そへ歌・かぞへ歌・なずらへ歌・たとへ歌・たゞごと歌・いはひ歌。これについては、仮名序本文にすでに存在する割注をはじめ、古来うるさく言われてきたものだが、それは措く。ここでは、かぞへ歌、なずらへ歌、たとへ歌の三例を引く。

#### かぞへ歌

咲く花に思ひつくみのあぢきなさ身にいたづきのいるも知らず

#### なずらへ歌

君に今朝あしたの霜のおきていなば恋しきごとに消えやわたらん

#### たとへ歌

わが恋はよむとも尽きじ荒磯海の浜の真砂はよみ尽すとも

万葉以前から文字表記時代まで貫通する要素として、日本地域には癖のように、「だじゃれ」とも見える同音異義語表現がある。これは何故かと考えてみるに、文字の表記より口で言い耳で聞く音の要素が、他を圧して立ち勝っていたからと考えるよりほかない。何かをしゃれてみたり当てこすったりする場合でも、文字の共通より音の共通を選ぶほうが前さきのかたちであつたらう。

かぞへ歌においては、この歌は古今集中の「物名」に似るが、「思ひつくみ」（それをそとは白浜の、などと同様）の「つくみ」が「思ひつく身」と鳥の「鶴」（ツグミ・突く身）の掛詞で、その「掛け」はこれだけで終わらずに、「身にいたづきのいる」を、病の意の「いたづき」と矢の鏃の一種の「平題筋」（いたづき）に掛けて、また「居・入る」と「射

る」とが掛けられて、恋の痛みを詠むといった手の込んだことをやっている。

なずらへ歌は、上句の前半は「霜のおきていなば」を呼び出すための序詞じょしごで、下の句の（霜が）「消えやわたらん」に掛かる。かつ「置きて居なば」と「起きて去なば」とが掛けられた、どうやら「きぬぎぬの朝」のことを詠んだものらしいが、どこか「てには」の合わないところがある歌だ。

たとへ歌は判り易い。巷間伝えられる石川五右衛門の、辞世の歌の本歌のようでもあり、同音異義の要素がない。上の句と下の句の「よむ」が共通する音的要素だが、二義は持たず、同義である。「よむ」は後世の「心の内を押し量る」意の「よむ」というよりは、まだそれほど意義分岐しない、空間的に数を「よむ」（算える）ことに力点が置かれたもので、現在の喩にもっとも近く、また多い形だ。（総じてこの三種の歌を含む六つの風体のそれぞれがどういう種別であるのか、詩経の六義ほどには明確でない。というより現在のわれわれの判断では押し量れないものがあるというのが正直なところだ。）

これら同音異義語をふくむ歌の数々は、当初、海や山や鳥や、その他空間的イメージに關しても、像がないとは言うわけではけつしてないが、そのありようは現今とはまったく違っていたはずである。すなわち「音の共通」としての喩から、表記の時代にいたって明確化されてくる、文字像を絡めた喩につづくみちすじがあつたはずだ。こういった文字像としての喩は主として表意文字（漢字）の視覚的イメージが内面化されて出来たものかと考えられる。だが、ほぼ女文字で、梅や夜や雪、月などの漢字（表意文字）が、仮名の中に埋没したような表記の古今集の和歌では、「音の共通」としての喩が、万葉集以上に反省的かつ先鋭に自覚されていたと思われる。

ところで、「音の共通」からみちびかれることとして、先ほども述べたが、文（表現）がすべからず非一義的だという事実がある。これは、文に本来的に用意されている喩性と

言っても同じことだ。文がもし一義的なものでしかなかったとしたら、「たとへ」も「なずらへ」も存在できないだろう。仮に「音の共通」があつたとしても、義の異なる文同士は共通性を見いだせず、まったく別の文と見られるだろう。ある岩を別の岩で喩えたり説明したりすることは、すでにしてコトバである。二つの事実の相似は、じつのところ二つの言語の相似にほかならない。あるものを別のもので喩えうることは、じつは究極的には、その「もの」が実在の側には属していないことを示している。つまりそれはコトバが実在には属さないことを示している。二つの現実の岩同士、絶対にお互いを交換できないという点が、「岩」が実在であることのゆえんであろう。

この文（表現）が持っている多義性と「音の共通」に関して、もう一首の歌を考えて（「解釈」して）みたい。

難波江のあしのかりねの一よゆへ身をつくしてや恋わたるべき

千載和歌集恋部に採られた、皇嘉門院別当という女房の作だが、われわれには百人一首の歌として親しい。さて、歌枕である「難波江のあし」は「かりね」を導き出すための序詞だが、じつさいの難波行きも匂わすか。それとも難波行きそのものも見立てか。千載集における歌の詞書には、「摂政、右大臣の時、家の歌合に旅宿にあふこひといへる心をよめる」とあるように、まず題詠であろう。難波江の縁の「あし」（葦）は「刈根」「仮寝」と通じ、さらに「かりねの一よ」は這いまつわるように「刈根の一節」「仮寝の一夜」へとつらなつて、旅中のひめごとを示唆する。次の「ゆへ」に至るまでの上句のぜんぶを序詞と見ることもでき、またそうではなくさいごまで意味ある一文として継続した陳述の続きと見ることもできる。難波江から続く縁語で、「身をつくし」は「滯標」と重なり、「すっかりこの身を捧げてひたすら恋いつづけなければ

ばならないのでしようか」という「恋わたるべき」で解決を見るが、これを序詞からの解決と見ることは（そういう考えも可能であるだけに）却つてむづかしい。「難波江のあし」で始まつた一つの詩は、歌枕、序詞、掛詞、縁語：等々を駆使して、ついに難波江のぬれぬれとした水気から離れようとはしない。というより、「あしのかりね」「ひとよゆへ」「みをつくしてや」はそれぞれ、一義一義に分かれてこそそう読める同音異義語、所謂「だじゃれ」や「地口」ではなく、二義ないしそれ以上が分化不能状態の、詩的多光体として観じられるのだ。

このような読みのうえで、今までも述べてきて言うまでもないことだが、文（表現）が一義的でないということが、その「解釈」というものを生む。文が「解釈」可能にして非一義的であるということは、すべての文は喩であり得るということだ。それは普通の文がそのまま喩としても見うる、ということでもある。喩とは全人間的現実（自然を含む）との関係性ともいえる。喩は必ずしも現実自体に直結するわけではないが、現実からの糧道を断たれた喩は詩として死んでいる。いっぽう自然そのものは、究極的には喩の対象とはなり得ない。とはいっても私の言う自然とは、樹や雲などのような「言語」のことではない。

喩は直喩と隠喩に二分されるだけのものではなく、その拡がりや俯瞰するにはより広く高い視点が必要であろう。逆から言つて、これは吉本隆明氏が提起した問題だが、一義性の意味以外の一切を排除する文というものを想像できるだろうか。それが一義的であり得るのは、その文自体ではない、その文を一義的に読むしかないように条件づけられた場面に限られる。そのように条件づけられず、まったくフリーの状態に置かれてその文が読まれたとき、書かれた内容がいかようであれ、その「読み」はまったく読むものの恣意に任される。最近ではいちばん判りやすいこととして、それは「笑い」の対象とされる。太古

からの例しでいうとなれば「もどかれる」のである。この「もどく」とは、真似る、似せる、という義で、喩の（折口信夫的に言えば芸能の）もつとも端的な姿を示している。

この、「もどく」ことを、折口信夫の言のなから拾ってみる。もちろん、そのありようは現在のような冷笑的なものとは無縁である。「古代研究」より、「国文学の発生（第二稿）」中の箇所を引く。

2010/08/23

此まで、才の男は専ら、人であつて、神樂の座に滑稽を演じる者と言ふ風に考へられて居る事は、呪言の展開の処で述べた。江家次第・西宮記などにも「人長の舞」の後、酒一巡して「才の男の態」があると次第書きしてゐる。此は、後には、才の男を人と考へる事になつたが、元は偶人であつた事を見せて居るのである。「態」の字は、わざ・しぐさを身ぶりで演じた事を示して居る。神樂の間に偶人が動いてした動作を、翻訳風に繰り返して、神の意思を明らかに納得しようとするのかと思はれる。（略）相手の一挙一動をまねて、ぢり／＼させる道化役を、もどき（悟）  
と云うて、神事劇の滑稽な部分とせられて居る。（全集第一巻114ページ）

これをよくよく読んでみると、「もどく」ことは見かけは滑稽でにぎやかでも、じつは偶人（人形）による無言の「態」であることが判る。また「相手の一挙一動をまねて、ぢり／＼させる道化役を、もどき（悟）」と云うて、神事劇の滑稽な部分とせられて居る」という指摘は、「もどき」が単なる機械的な所作動作のコピーではなく、ある種の仮構に通じる誇張の存在を予想させる。

それが滑稽な動作であれ、もとは「神の意思を明らかに納得しようとする」神聖な反復部分を含んでいたという点は重要である。詩は、ふりさけ見ればこの神聖さに係るにぎにぎしさと沈黙と、二つながら具えてはじめて動きだす特別な何かなのであった。神の行為や意思のままの写しではない、「もどく」

ということはあらゆる喩の始めである。そこで言葉は、民譚が伝える山中のヤマチチのよ  
うな、言葉相互が映発し合うものでない（それは自己言及でしかないから）、沈黙や無言の側の関係によつて、はじめて卵割と増殖が開始されるものなのだ。

\*難波江の歌に関し、島津忠夫氏の『百人一首』（角川文庫）の解釈を一部分用いています。

## confidence

映画「Z」の中でジャック・ペラン演じる新聞記者がパスポートを手渡すために相手と落ち合った裏道のレストランのテーブルに置かれた食べかけの丸パンが、ずっと心から離れない。池袋のどのパン屋にも売っていない。ならば、自分で焼くしかない。そのうち、きっと。(後藤)

母が老人ホームに戻ってから、驚くほど快調になった。なぜか分からないが、すっかり安心している。代わりに、父の認知症が進んでいる、と職員から電話があった。でも会話におかしなところはほとんどない。「今まで太い線と細い線のふたつでやってきたけど、今は細い線だけになってしまった」と父が言う。感覚としてそうなのだろう。なんとかしてやりたいが。(木村)

面白いことをお教えしましょう。題して、「コトバノヒミツのミツケカタ」。まずは、あの有名なヒット・ソングの2行を思い出してください。「ふたりで明かり消してふたりでドアを閉めて」。さて、ここで、2行の動詞を、そのまま入れ替えてみると、「ふたりで明かり閉めて ふたりでドアを消して」。どうですか? ドキッ、としませんか? たしかに、何かが起きたんです。これが、コトバノヒミツです。みなさんも、いろいろ試してみてください。何もなしどころで、はじめから、ドキッ、とするコトバを用意できるようにしたら、あなたも詩人のなかま입니다。(野村)

私の名前は「高広」と書かれることが多いのですが、一応「高弘」です。「広」でも「弘」でも意味は同じなんだからどっちでもいいと思うのですが、表記が2つに分かれるとネット検索などで不便なので、

一応「高弘」ですということにしておきます。実は、自署するときにはハシゴ高で「高弘」と書きますが、これは書くときにはラクだからで、キーボードで入力するときには「高」を使います。戸籍はハシゴの方らしく、住民票などには律儀に「高弘」と印刷されていて苦笑してしまいます。こんなの出生届を受け付けた戸籍係の方が書きやすい方を書いただけだと思うんですけどね。そもそも、正しい漢字なんてことをうるさく言うようになったのは、学校教育が始まってテストをするようになってからではないでしょうか。だから本当にどうでもいいんですけど、一応私個人としては、キーボードで入力するときには「高弘」にしております。昔出した詩集も「高弘」表記です。わざわざここに書くようなことでもないような気がしますが、まあそういうところですよ。(長尾)

神社仏閣は好きなのですが、いつもその造営にかかわった人達の人生が気になってしまいます。大きければ大きいほど素晴らしいだけではすまされないものを感じます。なぜか建物の前に広がる深い青のほうに魅かれてしまいます。じっと見入ってしまいます。(福島)

最近、年甲斐もなくシルバーアクセサリーをつけるようになった。キツカケは今年、仕事や職場でいくつも悪いことが重なっていることを掛かり付けのマッサージ師に話した所、「邪気を跳ね返すためには、塩と鏡を持つと良い」とアドバイスされたこと。塩はいいとしても、仮に手鏡をポケットや鞆に入れていて、間違っただけの経済学者のように迷惑防止条例違反で逮捕されてしまったらかなわないので、代わ

りに光沢のある銀のピルケースを首にかけ、その中にラップで包んだ塩を入れることにした。また、やはり行きつけの美容室の店長に、天然石の中ではオニキス（とラピスラズリ）が魔除けにいいと言われたため、黒オニキスをペンダントトップとしたネックレスもするようになった。利用しているのは新宿や北九州などの専門のネットショップ。それらの護符的な効果のためか否か分からないが、それ以来、もう余り悪いことは起きなくなつたような気がする。

（秋川）

メルヴィルの晩年の作「パートルビー」が柴田元幸氏の訳でネットに上がっている。この小説を上肆したあと、メルヴィルは、沈黙へと傾斜してゆくのだが、その沈黙の中心に一條の光があたるような見事な翻訳になっている。ネットサーフィンでも、たまにはこういう拾いものをする。（坂入）

初めて詩を書かせていただきました。いま自分にとって乗り越えなければならぬ問題は「家族」です。あまりにありふれたものですが、仕方がありません。どのようになり越えるかによって、その後詩を書き続けられるかどうかが決まるように思うからです。簡単に行ってしまう「家族」を捨てるか否かの二者択一です。どちらに転んでも、それが宿命だと考えて生きていくしかない。いまさらですが、そろそろ腹を決める時期に来ています。（中村）

肉体は「私」という意識の座、つまりそれなくしては「私」という意識をなすことができないベースである。しかし時に、「私」の前で肉体は桎梏となって現われることがある。つまりその時この二者の間にある裂け目が露出しているといえよう。その昔、愛読した詩にこんな一節がある。

「ぼくたちを閉じこめている格子は／鉄でもなければ、木でもなく／なまの筋肉で出ている、／この動く格子のなから／ぼくはどうしても逃れることができない。」（鮎川信夫「夜の終り」）この言葉は僕の中では時に応じずつと響いている。若い時は自意識の煩悶として、老いを実感する時は、まさに肉体が「私」の前に大きな障害として現われてくる。これらのことから肉体と意識の相関は生やさしくはないことなのだといえよう。そして老いが社会の前面にせり出て来た現在、この二者のことは、もっと緻密にたどられるべきだと思う。

（山岸）

魔が差して、15年いい感じで鳴っていたスピーカーを「ちよつと治した。」これがいけなかった。……悔いの日々のその果てに、ソリッドな空気に淡い甘みをまぶしたような音が、昨夜不意に戻つて来た。誰の曲を聴いても、遺書みたいに聞こえる。……

The Troubadour's Serenade は、アレクサンドル・グラズノフ作曲「中世より」から、吟遊詩人のセレナーデ。（和田）

頼み込んで妻にピアノを教えてもらおうようになった。沙翁ではないが、「言葉、言葉、言葉」から成る世界を相手にしていると、頭の中が堅い胡桃のように緊張してほだけなくなつて来る。これは一種の病気である。絵でもよかつたが、妻がピアノをやるのでそつちでお願いして、音を出してみると、これが悦びであることを知った。数小節、どころか数音にすぎないが、両手でやれる僅かの音のエコーがじつに軀で明澄に鳴るのだ。よくよく思うに、言葉は実体でないけれど、音楽はまぎれもない実体なのである。だが私が温習しているのは、邦題「キラキラ星」なる単純な主題であり、ピアノもデジビに過ぎないが。（倉田）